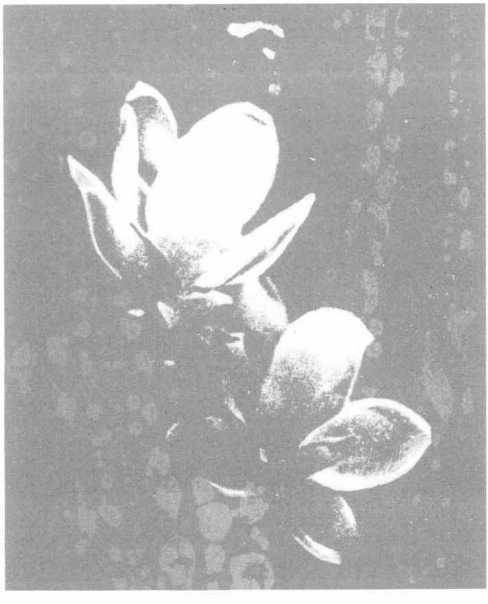
鴨

吉田知子

中央公論社

鴨



中央公論社

鴨

定価一二〇〇円

昭和六十年八月十日　初版印刷
昭和六十年八月二十日　初版発行

著者　吉田知子

発行者　嶋中鵬二

印刷所　三晃印刷

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替東京一-三四
©一九八五　検印廃止
ISBN4-12-001413-4

目次

鴨　5
すずめ、めじろ　35
オートバイ　55
白い花のある温室　87
美人系　119
勘助さんのヘソの緒　137
死に水日記　157
御成婚　179
直角三角形　201

装幀　東谷武美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鴨

鴨

仲田かねはバスからゆっくり降りた。出口へ行くのが一人だけ遅れたので運転手は不機嫌そうな顔をしていて、かねが降りたとたんに発車させた。

かねは、すぐに幼稚園と民家の間の小路へ曲りこんだ。リヤカー一台通れば人間はどこかへよけなければならぬ狭い道である。通る人も少ない。両側は、ほとんど槇の生垣である。たまに歩いている人は不審そうにかねを眺め、問いかけて来たりする。

「おばあさん、どこの家へ行くだい。迷ったんかね」

彼らにとっては、この道は自分の家の中のようなものなので、知らない人はすべてうさんくさいと思っているのだ。

「へえ。なんです、そこで聞いたら、こっちが湖へ行く近道だと言うもんだで。違いますかね」

「表を通ってもおんなしだよ。この道はまっすぐじゃないで。表を通るこんだ」

バスの通っている道を歩いても湖へ行ける。かねの降りたバス停から二つ目の「湖入口」とい

うところで降りて曲れば真直のよい道が湖まで続いている。
もちろん、かねもそれを知っているし、初めはいつもそうだったのである。しかし、この頃は曲りくねった細い裏道ばかり歩く。
歩くことも目的の一つだった。足からとしをとるのだから。姉ののぶが家の中でつまずいて足を折り、寝たきりになってから、急に自分の足が気になりだしたのである。寝ついてから半年でのぶはすっかり呆けてしまい、もうかねの顔もわからない。
元来、人通りの多い、車の通る広い道が好きでないということもある。
そういう道では他人に監視されているような気がする。
おかねさ、どこへ行くだね。何の用たしかえ。嫁さまは、この頃は家にいるかの。息子のボッケェは、はあ治ったかや。西浦の畑を売ったっちゅうのは本当か。
地域の人は皆、かねの息子が遊び好きで、嫁も出好き、二人とも百姓が大嫌いで田畑を片端から手放していることを知っている。そればかりか、かねの姉の、のぶのことも、実家のことも、夫の三代前のじい様が酔っ払って溝へ落ちて死んだことも知っている。
かねが足をきたえるために歩いていると言っても誰も納得しないだろうし、本当に本当の「散歩」だとわかったら何を言われるかわかったものではない。やはり呆けたと思われてしまうだろう。
湖の傍の村は、かねの所からずっと離れているので、かねを知っている人はなかったが、人々の目つきは同じことである。

自分の村でバスに乗るのを見られた時はいつも「老人センターへ行く」とごまかしていたが、ここではそれも通らない。

湖へ行くと聞いて解放してくれるのはあっさりしているほうで、「湖へ何しに行く」「あそこに何があるのだ」と、しつっこく訊いてくる。答えに満足しないと、「この頃はコソ泥がはやってるみたいでなあ。はかってあった米を盗まれた家があるんだと」と、いやみたっぷりに言われたりする。

八幡さまの裏で直角に折れ、田圃の畦を通って湖岸に達するとホッとする。湖岸の道は畦よりだいぶ高いので周囲を見まわしてから急いでよじ登る。

湖を半周すると造りかけの公園がある。

いや、当局に言わせると、もう完成しているのかも知れない。

七、八年前、できたばかりの頃は桜まつり、菖蒲園、子供ボートレースなど、盛り沢山の行事が行なわれ、物珍しさも手伝って大勢の市民が押しかけたものだった。しかし、人々は二、三年で飽きてしまったらしい。風致地区のためか喫茶店一つなく、自動販売機も何もないせいかも知れない。景色だけでは三十分も保たないのである。それでも、春は花を見に来る人が少しはおり、夏はヨットやボートをやる人もいるが秋冬は閑散としてしまう。当局も飽いたのか金がないのか、遊歩道は途中でちょん切れている。折角植えた木も手入れしないので伸びほうだいだった。結局、立派な公衆便所と、その横の休憩所だけが残った。

かねの目的地は、その休憩所である。

そこへ行けば必ず誰かいる。
トイレ、水飲み場、ゴミ捨て場があるから、弁当とお茶を持って行けば湖を眺めて一日喋って遊べる。お金がいるのはバス代だけである。
もう五年くらい前から皆がそこへ集まり始めたという。
教えてくれたのは、松野よしだった。
「まあ、春や何かは他の人も来るけどね、全然知らん若い衆と口きいたりさ、子供らが騒ぐのを見てたりするのも、結構面白いよ」
よしも、かね同様、老人センターで湯に入ったり歌ったりするのは嫌い、ゲートボールも俳句もやりたくないという人種だった。老人会に入っていても出たことがない。会というものがいやなのである。かねは、よしほど気が強くないから、老人会には時々顔を出していたが。よしは今は横浜の次男の所へ行っている。二、三ヵ月というのが一年にもなるのは、こちらの長男のほうへ戻りにくいのか、それとも向うで病気でもしているのか。かねにすれば、すべてに強制的なよしと一緒より一人のほうが気楽だった。
休憩所へ入って行くとアラブさんが若い男と話していた。アラブさんは六十くらいの痩せた人である。かねはアラブさんの年齢も名前も知らない。
年寄りというものは、おおむね疑い深く、容易に相手を信用せぬものだから、互いに住所氏名経歴を話し合い、共通の知りあいがあったり、近くに親類があったりすると、そこで初めて打ちとけるのである。それに、聞くほうも話すほうも、そのほうが面白い。知らない所の知らない人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の話など聞いてもしょうがないのだ。
それがこんなふうになったのはカナダさんのせいだった。
カナダさんが、そうしようと言ったのである。カナダさんは家が近いらしく、夏も冬もここへ来ている。
「そういう話をしたければ老人クラブへ入ればいいんだ。ここはクラブじゃないんだから、知らぬ人間が一期一会で会って別れたらいい。老人くさい話は一切なしにしよう」
土地の人ではなく、大学の事務長かなにかをやっていたという。声も体も大きい人で、勝手に皆の名前をつけた。かねは「トンガさん」である。
「トンガさん」になってみると、それも悪くなかった。急に自由になったような気がして話題も広くなった。
もっとも、広瀬さんのように断固としてカナダさんに反対する人もいる。しかし、三対二か三対一で女のほうが人数が多く、女たちは反対する勇気などないので、皆「アジアさん」「スラブさん」「スエズさん」ということになった。
アラブさんは面白がって賛成した口である。彼は誰の話も熱心に聞き、大抵の意見に賛成する。
今日はアラブさんだけか、と思ったが、湖のほうを見ると、湖岸のベンチの傍の芝生に四人坐っていた。時には十人も集まることがあるが、大体五、六人である。のべにすれば三十人以上になるだろうが、老人というものは案外移動が激しくて、かねも、もう古顔のほうになっている。
かねはひとまず休憩所に腰をおろした。

もう昼近いので奥の方までは陽がささない。ここは湖の西側で、休憩所は湖のほうへ向けて東向きに建てられているから午後からは陽蔭になる。
「そこは寒いだろう、トンガさん。こちらへおいで」
アラブさんがそう言ったので、かねはにこにこして答えた。
「いえ、いいですよ。ずっと歩いて来たからちっとも寒くありません」
こんないい言葉を使ったら、うちの近所なら皆が吹きだして悪口を言うだろう。「トンガさん」だからできることなのだ。かねは極力上品な素振りでスカートの皺をのばし、湖面を眺めた。
「あら、鴨かね、あれ。ゴミじゃないわねえ」
一面に黒い点が浮んでいる。
かねは何年か前、視野に黒い点がちらつく病気になり、それは医者へ行っても治らず、今も続いている。病気ではなくてとしのせいだというのである。湖面の黒い点は、その症状と似ていたが、鴨だということはわかっている。
「今日はまた多いなあ。風がないしね。ここが禁猟区だと知って、遠くに住んでいる鴨たちも沢山来てるんだろう」
「何か異常ですね、ああ多いと」
若い男が言った。彼に逢うのは初めてではない。もう四、五回ここへ来ている。彼はいつも三十分くらいで他へ行ってしまう。
「ひしめいている。何でも多すぎるのは気味が悪いなあ」

若いと言っても学生ではなさそうだった。三十になるかならないかというところで、顔色がどす黒い。セールスマンが油を売っているのだろうと考えていたが、そうでもないらしい。手ぶらだし、会社勤めらしい縛られた感じがしない。服装もセーターの上にジャケットを着て、ちょっとそこまで煙草を買いに来たという恰好だった。

「若い人がそんな言い方をしちゃ、おかしいよ」

アラブさんが笑う。

「ぼくみたいに年をとって痩せて生命力も乏しくなった人間ならわかるが、あんたがそんなこと言っちゃ」

顔は見えないが男も笑ったらしかった。

「この頃は若いほうが生命力が薄いですよ。執着もないしね。なんにも持ってないんだから、執着のしようがない」

「まだ独身なの。恋人はいないのか」

男は黙っていた。

芝生に坐っているカナダさんの高笑いが聞こえて来た。彼はよくきわどい冗談や、どぎつい皮肉を言って、皆が白けて黙ると一人で高笑いするのである。

若い男は立ち上りながら言った。

「年寄りは皆同じことを訊くんだよな。他に関心があることないんだろう。一日中湖を見ながら猥談してやがる。鴨のほうがよっぽどましさ」

そのまま出て行った。それを見送ってからアラブさんがかねを見た。かねはアラブさんの言いたいことを代弁してやった。

「若い人は難しいわね。何か面白くないことでもあったんですかね」

洋品店は道の角にあった。

角と言っても、東側は舗装もしてない細い道である。表通りのほうは広い硝子窓で入口も一間幅だが、横道は三尺である。角田吉男は30％offと大きな赤字のビラの貼りつけてある横の入口から入って行った。店内は一面に洋服が吊るしてあって森の中のようだった。四、五人の女客がいたが誰も吉男のほうを見なかった。顎の張った大柄な女主人だけが吉男を見た。木々の間から顔だけ出したバファローに似ている。しかし何も言わなかった。吉男は商品を眺めるふりをした。どうやら女物ばかりらしい。視野の隅に暗い急な階段が見えた。吉男は少しずつ階段の近くへ移動した。

吉男は、上を指さして「いるか」と訊いている自分を想像した。いつも、考えてみるだけだった。決してそうはならなかった。隅を這って歩いている。咎められるのを待っていると言われてもしかたなかったし、実際そうなのかも知れない。

階段の登り口へ達した。二段目に毒々しく光る紫色のビニールのサンダルが重ねられている。

ふり返ると女主人と目が合った。今度は上半身が見える。いる場所がさっきと違う。顔に合わせたような怒り肩の肥った中年女がいかめしい顔で睨んでいる。

吉男は靴を脱いで階段を登り始めた。後から何か言われるかと思ったが女主人は相変らず黙っていた。

登り切ったところは三尺四方の狭い空間だった。汚れた硝子の入った小さな窓がある。両側に板戸があり、片側は十センチ開いていた。覗くと段ボールの箱が積み重ねられているのが見えた。倉庫らしかった。吉男は、もう一方の戸を叩いた。応答はなかった。もう一度叩き、少し待ってから戸に手をかけた。留守か、錠がかけてあるか、と思ったが戸は簡単にあいた。

女がこちらを向いて机によりかかって坐っていた。黒いブカブカのジャンパースカートを着ている。安物らしく皺だらけだった。

「何だ、いたのか」

部屋の隅に蒲団がたたんである。小さな本棚はピンクのカーテンが掛っていて中は見えない。部屋は片付いていたが、それがよけいに寒々とした感じを与えた。吉男は手をこすりながら電気ストーブの前にしゃがんだ。

「寒いなあ、こたつないのか、お前のとこ」

「勝手に入って来て何よ。誰が入っていいと言ったのよ」

吉男は電気ストーブの前にかざしていた手を引っこめた。

「だから、ノックしたじゃないか」

「音だけじゃわからないわ。風かも知れないし」

「今日は風はないよ。珍しいくらい静かだ。さっきも湖を通って来たけど鴨が……」

「人間ならね」と女が吉男の言葉を遮る。
「人間らしく挨拶するもんだわ」
「何て言うんだよ。お前の名前知らないんだし」
「マリよ」
「それは、でたらめだと言ったじゃないか、自分で。マリでもミキでもミチコでも同じだって」
マリは片膝を立てて坐り直した。少しは機嫌が直ったらしく、机の上から蜜柑を一つ取って吉男に渡した。
「どうしてここがわかったの」
「お前のあとをつけたからさ、この前」
「いやらしい。どうしてそんなことをするのよ」
「わからん。暇だったからだろ」
古びたデコラの机の上には蜜柑が六個、ティシュ入れ、ハンドバッグ、手鏡などが雑然とおかれている。
「何してたんだ」
「何もしてないわ」
「ここ、本当にお前の部屋か」
マリがここで生活しているという気配がなかった。まるで空き部屋だった。
「ここが私の部屋かどうか、あんたには何の関係もないでしょ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com